

4. 2 雪の北帰行

小林 茂夫

昭和 36 年から 37 年にかけて、里雪で列車が 40 本、乗客二万人が閉じ込められた。佐世保から正月休みに新潟県、出雲崎町の実家へ帰省するのに、年の暮れの 29 日に出発し、正月の 3 日夕方、午後三時に到着した。

29 日 夜行列車で佐世保発、30 日昼東京着。自由が丘の K 兄宅へマージャンをやりこ。学生時代の雀友と徹夜。31 日朝食をご馳走になり、上野駅で列車に乗る。暮れにしては座われたし、混んでもいなかった。水上を過ぎ、トンネルを出たら大雪。のろのろ走り、ついに浦佐駅で停車。湯沢と長岡の間。大雪のためこれ以上進行できないとアナウンス。

各駅に一列車ずつ停車。大晦日なのに列車の中。おにぎり二個貰う。元日は駅近くの公民館の二階に、板張りの床。雑煮の朝食。昼、夜は握り飯。ごろ寝。二日の午後、順次走り出す。長岡に夕方到着、旅館が提供される。四日目にしてようやく畳の上、布団で寝る。

三日九時出発。昼食の握り飯二個貰って。海岸の田舎町まで 20 キロ。同じ出雲崎へ帰る二十人ほどの人たちと一緒に、一面雪原を、膝まで埋まりながら。道らしいところを見当をつけて一列で。先頭は長靴。革靴なんかは私一人。人の足跡をたどりながら、背中には中型の旅行鞆を担いで。途中、峠道、雪崩が起きないかと、ひやひやしなながら山道歩く。頂上のトンネル過ぎて町へ。さらに 6 キロ歩いて、夕方三時到着。出発してから足掛け六日の帰省旅行でした。

九州から新潟県まで帰るのに、東京で一休みなんてことで罰が当たったのでしょうか。家族が待っているのに、早く帰ればよかった、独り身の若気の至り。帰りの寝台の切符があり、家には三泊四日。長岡には行けないので、遠回りの新潟から長岡経由上野へ。三角形の二辺を。途中トンネル内で車内の電気が、しばらく消える。真っ暗な穴倉へ落ちていくような感覚で、不気味でした。

日本列島の半分以上を乗車。西端の地で青春を謳歌。楽しいことが沢山ありました。北端から野澤兄、東京から杉本兄が同時に来佐、我が家で歓談。